

## ギリシア語とアルバニア語における慣用句の比較

## — いくつかの名詞と不変化詞について —

井浦 伊知郎

## 0. バルカン諸語の慣用句に関する研究

バルカン半島の諸言語に見られる慣用句 (phraseology または idiom, 『ことわざ』や『格言』を含む場合もあるが、本稿では基本的に除外する) については、各言語圏で長い研究の蓄積があり、特に語彙論や意味論の観点でまとめられた慣用句辞典も数多く刊行されている。

筆者が研究対象とするアルバニア語についても、科学アカデミー・言語学研究所の定期刊行物には慣用句をめぐる論考が頻繁に掲載されている。その多くには、アルバニア語の慣用句をアルバニア語という個別言語の言語論あるいは文化論という観点でとらえながら、同時にバルカン半島の言語圏全体に見られる共通項をも探ろうとする傾向が見られる。またごく最近では、Lakoff などの提唱する「メタファー論」に関連した認知言語学・認知意味論的な議論も展開されている (Gjocaj 2001, 杉本1998)。

一般向けによくまとまったアルバニア語の慣用句辞典として、1980年代までは、Mehmet Gjevori の *Frazeologjizma të gjuhës shqipe*.

(『アルバニア語の慣用表現』) などがよく知られていたが、特に90年代に入ってからでは Jani Thomaj や Xhevat Lloshi など、語彙論を主な研究対象とする言語学者の手になる本格的な慣用句辞典の編纂が進められている。

本稿では、比較的新しい慣用句辞典である *Fjalor frazeologjik i gjuhës shqipe* と *Fjalor frazeologjik ballkanik*、およびその他の辞書・語彙集から、特定の名詞を対象を絞って慣用句を拾い出し、それに可能な限り現代ギリシア語の例を対照させ、両言語間の異同を考察する。

## 1. 動詞＋名詞を中心とする慣用句の例

慣用句の構造にはさまざまな種類があるが、本稿では、対照しやすいものとして、核となる名詞が身体部位、およびそれに関連する概念であるものを選び、それに少なくとも動詞一つを伴う慣用句（つまり慣用的な動詞句）の例を拾い出してみよう。

### 1.1. 身体部位 「心」と「心臓」

ここでは「心」や「思考」に関連する慣用句を見てみよう。メタファーという観点から見ればさしあたり体内器官の「心臓」にあたる名詞で調べてみるのがよいと思われる。そこで両言語で「心臓」にあたる η καρδιά (f.) と zemër (m.) を含む慣用句を調べてみた。

アルバニア語で zemër を含む例は 95 個であった。そしてこのうち 93 例で、対照可能なギリシア語の慣用句すべてに καρδιά が含まれていた。これらはいずれも、核となる名詞だけでなく、それに対応する動詞や形容詞の選択まで酷似している。

(1) Më doli nga zemra. 「私はもうそれが嫌いになった」(lit. 『私の心から出た』)

1.sg.dat. go out-aor.sg.3 from heart

(2) Μου βγήκε από την καρδιά. = (1)

(3) Ma hëngri zemrën. 「私は疑いの念を持った」(lit. 『私の心を食べた』)

1.sg.dat.+3.sg.acc. eat-aor.sg.3 heart-acc.

(4) Μου την έφαγε την καρδιά. = (3)

このように、一般的な動詞を用いる場合でも「βγαίνω 出る」「τρώγω 食べる」のように、原義が両言語で一致しており、文の統語構造もほぼ同一で、逐語訳が可能なものが多いのが、この地域の言語圏における慣用句の特徴である。例えば (1) および (2) はブルガリア語、セルビア語では

(5) Излезе ми от сърцето. = (1)

go out-aor.sg.3 1.sg.dat. from heart

(6) Istrgnuti iz srca. = (1)

go out-aor.sg.3 from heart

となる（ただし、ルーマニア語では動詞 a avea『持っている』を用いて a nu mai avea pe cineva la inimă、『心のどこにももう持っていない』となる）。

また、動詞を含まないものでも me zemër të bardhë = με άσπρη καρδιά のように色彩が示す意味まで同じものが見られた。

一方、例外となった2例は、次のようなものである。

(7) E ka mbyllur në zemër. 「彼／彼女はそのことを心の中に留めておいた」

3.sg.acc. close-pf.sg.3 in heart

(8) Το έχει μεσα του. = (7)

(9) Ma gjeti zemrën. 「彼／彼女は私に満足した」(lit.『私に心を見出した』)

1.sg.dat.+3.sg.acc. find-aor.sg.3 heart-acc.

(10) Μου έκαμε το κέφι. = (9)

ただし、(8) と (10) は共に καρδιά を含む文に書き換えられるので、実際にはすべての文が両言語でうまく対応していることになる。

(8') Το έχει μεσα στην καρδιά του.

(10') Μου έκαμε την καρδιά.

しいて相違点を考えるとすれば、(7) のアルバニア語文では動詞 mbyll が用いられているので (8) よりも心の中に「閉ざす、封じる」といった語感があること、またギリシア語では μεσα του のみでも意味が通じるのに対してアルバニア語ではそれができないこと、などがあげられる。さらに (10) の動詞 κάνω は「する、おこなう」が原義であり、そこから「とる、手に入れる」という意味が付与されているらしいのに対して、(9) の動詞 gjeti はむしろ「(探していたものを) 目にする、見つける」という意味のみで、アルバニア語の表現ではギリシア語に比べて「獲得」の意味合いが薄い。

## 1.2. 「魂」「意識」

前節で το κέφι をとりあげたので、「魂」にあたるアルバニア語 shpirt (m.)を含む慣用句を調べてみると、35例が見つかった。このう

ちギリシア語で το κέφι を用いた慣用句となるものは特に見当たらず、むしろ大多数が η ψυχή または前述の η καρδιά を用いた例であった。

(11) Iu dogj shpirti (për .....). 「(～のことで) 魂が焼ける (ように苦しい)」

3.sg.dat. burn-pas.aor.sg.3 spirit

(12) Tou káηke η ψυχή (για .....). = (11)

(13) Ma do shpirti. 「私は(それが)大好きだ」 (lit.『私の魂がそれを欲する』)

1.sg.dat.+3.sg.acc. want-sg.3 spirit

(14) Mou to θέλει η ψυχή. = (13)

この例では、ψυχή を καρδιά で置き換えても差し支えがない。また他には

(15) I heq shpirt. 「彼／彼女は息を引き取る」 (lit.『魂を引き出す』)

3.sg.dat. pull out-sg.3 spirit

(16) Tou δίνει πνοή. = (15)

また動詞を含む構文ではないが

(17) me shpirt të pastër 「清らかな心で」

with spirit clean

(18) με καθαρή συνείδηση = (17)

という例も見られたが、これらの場合でも συνείδηση や πνοή は、ψυχή あるいは καρδιά で置き換えても問題がない。また (16) では動詞に δίνω「与える」を用いているが、これはアルバニア語でも heq「引き出す」のかわりに jep「与える」を使う例があるので、実質的に両言語で逐語的対応が可能であると言えよう。

## 2. アルバニア語における動詞＋不変化詞の慣用句

アルバニア語の慣用句には、特定の不変化詞を用いた動詞句が多く見られる。これは現代ギリシア語の慣用句にはほとんど見られない。またすぐ後で述べるが、実は他のバルカン諸語にもほとんど見られない。例えば vë re「注意する、注目する」の vë は動詞「置く」であ

るが、re は単独で(名詞などとして)用いられることはなく、vë re の形ではじめて「注意、注目」の意味をあらわす。これに対応する、あるいは意味が近い現代ギリシア語は προσέχω か、δίνω βαρύτητα であろう。

(19) Vini re! 「ご注意ください!」(駅・空港などでのアナウンス)  
put-pl.2

(20) (ギリシア語では名詞 “Προσοχή!”) = (19)

(21) Mos (i) vini re (.....) 「(～を) 重視、強調するべきではない」  
(代名詞重叙あり)

not 3.sg.dat.

(22) Μη δίνεις βαρύτητα (σε.....) = (21)

同様の例はセルビア語では zapaziti、obratiti pažnju など接頭辞を含む動詞(+名詞)であり、ブルガリア語では забелязвам、обръщам внимание、ルーマニア語では a observa、a lua seama となる。

アルバニア語の re は、語源的には ruaj「保持する」から派生したものと考えられている(Orel 1998)。もう一つ特徴的な点をあげると、この慣用句はしばしば融合(univerbation)して一つの動詞 vërej「注意する、注目する」となり、さらに名詞化して vërejtje「注意、注目」となることができる。この場合は bëj「する、おこなう」や tërheq「引き出す」と共に動詞句を作る。

同様の例として bëj gati「準備する」の gati などにもこれにあたる。現代ギリシア語では προετοιμάζω となり、融合は見られないが接頭辞 për- によって動詞 përगतit「準備する」となる。

### 3. 考察

母語話者によるこれまでの研究結果から見て、日常的・具体的な名詞を含む慣用句の構造で、両言語間の極端な違いはないであろうことが予想できたが、1.および2.であげた例は、このことをよく示している。身体部位およびそれに関連する概念を含む表現について、両言語に大きな相違点は見られない。本稿では取り上げないが、例えば kokë と το κεφάλι「頭」や, mendje と η γνώμη (το μυάλο)「思考、考え」の例にもまったく同じ傾向がみとめられる。

ただし、動詞の選択について見ると、本論で指摘したように、それぞれの言語には微妙な差異があると考えられる。

一方で、不変化詞を含む慣用句はアルバニア語に豊富な用例が見られるのに対し、現代ギリシア語ではそれが接頭辞などで代用されるためか、ほとんど見られなかった。2.で述べたように、これはアルバニア語に独特な傾向ではないかと考えられる。というのも、アルバニア語ではこうした動詞（あるいは名詞や形容詞）由来の不変化詞が豊富であり、しばしば他の動詞と自由に結びついて、ある種の「句動詞」を形成する傾向があるからである。ギリシア語や南スラヴ諸語、ルーマニア語ではそのような句動詞形成よりも接頭辞による動詞形成の方がより頻繁におこなわれている。

\*本稿は2002年9月28日、広島大学で開催された第13回日本ギリシア語ギリシア文学会研究発表会において口頭発表したものに、加筆・修正したものである。

## 参考文献

- Gjevori, Mehmet (1980); *Frazeologjizma të gjuhës shqipe*. Tiranë: 8 Nëntori.
- Gjocaj, Zenun (2001); *Struktura leksiko-semantike e stilistike e frazeologjisë shqipe*. Prishtinë: Instituti Albanologjik.
- Orel, Vladimir (1998); *Albanian etymological dictionary*. Leiden: Brill.
- Stefanllari, Ilo (1998); *Fjalor idiomatik anglisht-shqip*. Tiranë: Enciklopedike.
- 杉本孝司 (1998); 『意味論 2 認知意味論』 東京：くろしお出版
- Thomai, Jani (1999); *Fjalor frazeologjik i gjuhës shqipe*. Tiranë: Shkenca.
- Thomai, Jani & Lloshi, Xhevat (et al.) (1999); *Fjalor frazeologjik ballkanik*. Tiranë: Dituria.
- Thomai, Jani (1998); *Leksikologjia e gjuhës shqipe*. Tiranë: Shtëpia botuese e librit universitar.